SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部
ボランティアセンターは持続可能な開発目標
（SDGs：Sustainable Development Goals）
の達成に向けた取り組みを強化しています。

NIIGATA SEIRYO

新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部ボランティアセンター活動情報誌

Niigata Seiryo University

SEIRYO VOLUNTEER

2024-2025 Information Magazine
www.n-seiryo.ac.jp

災害支援から学び、未来を考える

SEIRYO

災害支援から学び、未来を考える

CONTENTS

04 被災地に届けた行動と想い
学生たちが見た令和 6 年能登半島地震
①現地ボランティアレポート
能登半島地震復興の現場で学ぶ支援のカタチ
②現地ボランティアで見えた被災地の今
- 街の現状、被災者との対話、そして支援の意味 -
③ Interview
「つながる想い、支える力」- 災害ボランティアの現場から -
④被災地の声を届ける～次世代の架け橋として～

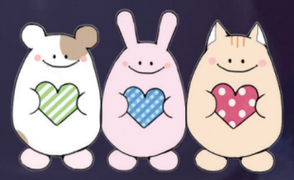
12 ぼらフェス 2024

14 クリアできるかな？？ミッション in ほんちょう
～学生たちがイベント内の企画と運営を担う！～

16 キャンパスを飛び出し、
地域に根差す、私たちの一歩

18 ボランティアセンターの概要

20 学生ボランティアコーディネーター
『ぼらくと』の概要とメンバー紹介



ぼらくとイメージキャラクター
ぼらくトリオ

『SEIRYO VOLUNTEER』とは

『SEIRYO VOLUNTEER』とは、ボランティアセンター直属の学生スタッフである、学生ボランティアコーディネーター（通称：ぼらくと）が制作・発行する活動情報誌です。2014 年に創刊した「ボラセン NEWS」を皮切りに、2019 年から現在の形になり、年 1 回の発行を続けています。

ボランティアセンターに設置するだけではなく、高校生や新入生にも広く知っていただけるよう、オープンキャンパスや年度初めのオリエンテーションなどでも配布しています。

また、『SEIRYO VOLUNTEER』は、本学ホームページからもご覧いただけます。活動情報誌の郵送も受け付けておりますので、ご希望の方は、ボランティアセンターまでご連絡ください。

VOLUNTEER

被災地に届けた行動と想い

学生たちが見た
令和６年能登半島地震

元日の能登半島を襲った地震。

その爪痕は、今もなお私たちの心に深く残っています。

被災地では、多くの人々が復興への道を歩み始めています。
その中で、学生たちが被災地に寄り添いながら
「自分たちにできること」を見つけ、行動してきました。

そうした被災地のために動く学生たちの姿勢には、
優しさと強い意志が感じられました。

不安や緊張を抱えながらも、行動を重ねる中で見えてきた
被災地の今、被災者との向き合い方、そして支援の意味とは――。

令和６年 能登半島地震 とは

令和６年１月１日、石川県能登地方の日本海沖を震源とし、最大震度７を観測した大地震。

この地震により、火災や津波、土砂崩れが発生し、多くの家屋が倒壊しました。被害は広範囲に及び、特に半島特有の地理的条件や高齢化が進んだ地域性により、復旧・復興には大きな課題が生じています。

上下水道や電気、通信、道路などのライフラインが寸断され、多くの住民が避難生活を余儀なくされただけでなく、倒壊や地盤隆起により生業を失った人々も多くいます。一部の地区では、一度更地にしないと再建が難しい状況に直面し、地域コミュニティの分断も懸念されています。

また、新潟県でも長岡市で最大震度６弱の揺れが観測され、特に新潟市西区では液状化現象による被害が深刻な状況となっています。

現地ボランティアレポート

能登半島地震復興の現場で学ぶ支援のカタチ

令和６年能登半島地震で被災した地域を支援するために、本学から８月27日（火）～８月29日（木）の２泊３日の日程で、石川県へボランティアバスを運行し、本学学生・教職員計14名でボランティアに参加してきました。

今回の実施にあたっては、日本財団ボランティアセンターとの共催、災害NGO結のご協力のもと実現することができました。

発災直後の本学の主なボランティア活動

発災直後から日本赤十字社新潟県支部をはじめとする他機関と連携しながら支援を行いました。

1　学内募金・街頭募金

1月9日（火）～12日（金）には学内にて、1月28日（日）には古町ルフル前にて、募金活動を行いました。学内・街頭を合わせて、139,505円の募金が集まりました。日本赤十字社新潟県支部を通じ、被災地への義援金として全額寄付いたしました。

2　新潟市西区災害ボランティアセンター運営補助・移転のお手伝い及び新潟市西区災害ボランティア活動に参加

新潟県内でも液状化による被害の大きかった新潟市西区に災害ボランティアセンターが設置され、本学ボランティアセンター職員も上記センターのお手伝いに加わりました。

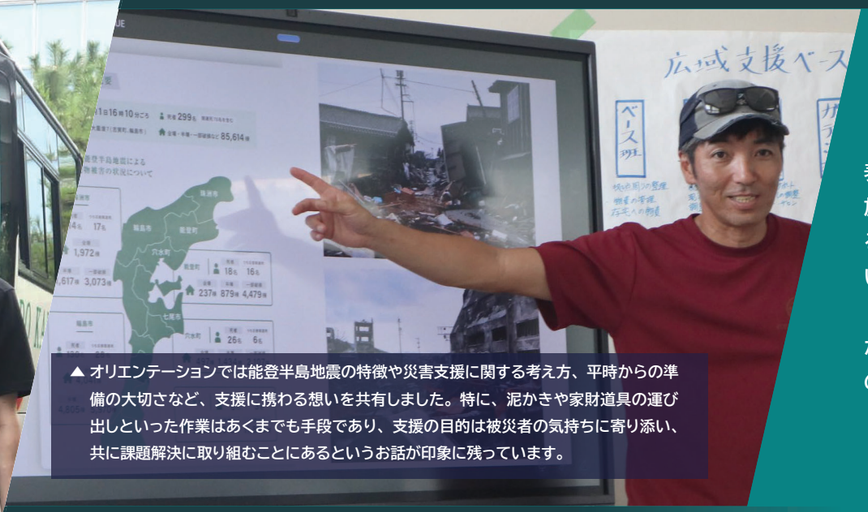
また、本学学生や教員も現地へボランティアに入り、液状化により噴出した砂を取り除く作業を行いました。

3　石川県珠洲市への救援物資の積み込み作業

能登半島地震の被災者を支援するために日本赤十字社新潟県支部で行われた応援フラッグ作成と石川県珠洲市に配送する救援物資のトラックへの積み込み作業に本学学生も参加しました。現地に行って直接支援はできなくても、今回の支援物資と応援の気持ちが少しでも被災地の方々に届くことを願いながら取り組みました。

主な活動

【1日目】オリエンテーション、訪問セットづくり、地域サロンの見学



▲オリエンテーションでは能登半島地震の特徴や災害支援に関する考え方、平時からの準備の大切さなど、支援に携わる想いを共有しました。特に、泥かきや家財道具の運び出しといった作業はあくまでも手段であり、支援の目的は被災者の気持ちに寄り添い、共に課題解決に取り組むことにあるというお話が印象に残っています。

初日は、災害NGO結の前原代表より、オリエンテーションの実施と3日目に仮設住宅へ訪問する際の訪問セット作成のご指導をいただきました。

また、活動拠点内でサロンが開かれており、被災者同士の交流の様子も見学しました。

【2日目】家財道具の運び出し、被災者との対話

2日目は、3軒の被災されたお宅にグループごとに分かれて訪問し、被災者の方々のお話を傾聴し、時間を共有しながら家財道具の運び出しを行いました。

◀自宅に置かれている家財道具は被災された方にとって、それぞれの歴史が刻まれた宝物です。家財道具を取り出すたびに大切な思い出も語ってくださる姿に、それらの運び出しだけが支援ではないことを痛感しました。

※写真は実際に運び出した足踏みミシン

【3日目】仮設住宅への訪問、ヒアリング

3日目は、事前に準備した訪問セットを持って、仮設住宅を訪問しました。被災者の方々の体調や生活状況、そして未来への不安など、じっくりと話を伺いました。災害NGO結、公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）のスタッフの方々からのアドバイスを参考に、被災者の言葉に耳を傾け、現状を正確に把握しようと努めました。

◀活動中に余震が発生した時、被災者の方が仮設住宅から外に出てきて、そのまま近隣の方と話されている場面を見かけました。その中で、被災者の方々が一人で過ごされるのを心細く思っており、今もなお不安な日々を過ごされていることを改めて感じました。

現地ボランティアで見えた被災地の今
- 街の現状、被災者との対話、そして支援の意味 -

1 被災した街の景色 そして、復旧の進まない現状

これまでの震災とは大きく異なる

令和６年能登半島地震では、山間部を含む半島全体が大きな被害を受けました。沿岸部は津波にのまれ、特に奥能登地域は孤立状態におかれました。

被災の爪痕

私たちが現地を訪れた際、全壊した家や傾いた信号、大きく陥没や断裂した道路など、地震発生から半年以上経ったとは思えないような光景が広がっていました。しかし、これは被災地のほんの一部に過ぎません。被災地の現状を理解するためには、実際に各地域を訪れて自分の目で見る必要があると感じました。

2 被災者との向き合い方

やるせない想いに触れる場面も…

大切な家財道具を取り出せたとしても、仮設住宅の限られたスペースに収まりきらないという声や、家を建て替えるからと仮設住宅での生活を拒む方もいらっしゃいました。被災された方の、やり場のない想いに触れる場面も少なくありませんでした。

被災者と支援者を分けない

初日のオリエンテーションで学んだ「被災者と支援者を分けない」という考え方は、今後の活動においても常に心に留めておきたい大切な視点です。被災者の方々も、自分のペースで、自分にできる範囲で、誰かの役に立ちたいという気持ちを持っていることを忘れてはなりません。

3 ボランティア活動の意義

▼活動初日は、全国から寄せられた支援物資を詰めた訪問セットづくりを行いました。物資を届けるという直接的な支援だけでなく、こうした準備作業も被災地の方々の助けとなる重要なボランティアのひとつです。

関わることの難しさ

活動中、スイカやおにぎりをご馳走になるなど、被災された方々の温かいおもてなしに触れる機会にも恵まれました。

私たちは一方的に「支援する側」だと考えていましたが、被災地を訪れること自体が、被災された方にとって大きな励ましになっていることを実感しました。明るく振る舞うその裏側には、様々な感情が渦巻いていること、そして被災当初から長い間、懸命に生活を立て直そうと努力されてきたことなど、被災された方の心身が想像以上に疲弊していることを知りました。しかし、私たちが新潟に戻った後もそういった状況は続いています。つらい心情を吐き出す場がなく、被災された方の様々な想いを感じる中で、ボランティアとしての関わることの難しさも同時に痛感しました。

災害ボランティアは直接的な活動だけでは完結しない

今回の活動を通じて、支援には色々な形があり、目に見える活動だけが全てではないことを改めて実感しました。現地に足を運ぶことができなくても、遠くから支える方法があり、それぞれの立場でできる支援が必ずあると感じました。私たちにできることは限られているかもしれませんが、一つひとつの支援がつながり、支え合うことで、ボランティアの輪が広がっていくのだと思います。

Interview

「つながる想い、支える力」- 災害ボランティアの現場から -

家財道具が語る震災の記憶

看護学科 3 年　榎 由起 さん

私は、被災者の方が 20 歳のころに母親から贈られたミシンや着物などの家財道具を運び出すお手伝いをさせていただきました。作業中、家財道具にまつわる思い出や震災前の生活を懐かしそうに話される姿が、とても印象に残っています。

また、震災発生時に靴も履かずに家から逃げたことや、近隣の住民が震災で亡くなったこと、「ここに住み続けたいけれど、家を建て替えるのも難しい」という切実な想いを話される様子に胸が締め付けられました。こうしたお話を伺う中で、震災によって地域のつながりや住み慣れた地域での生活が多く失われている現状を痛感しました。

故郷への想いと新たな生活

看護学科 1 年　渡邊 菜々子 さん

私が印象に残った出来事は仮設住宅訪問です。仮設住宅で新しい生活を始めても、倒壊した自宅の物品を運び出しに毎日元の家に戻る方や、やりがいを失わないよう自分の畑に通うという方が多くいました。被災された方とのお話の中で故郷への強い愛情、そして、災害発生から半年間の被災生活での疲弊の様子が端々で見られました。支援活動を通して、この先も被災された方の力になりたいと思いました。

被災者の方のお話を聞いていると、新しい生活に慣れること、そして失われたものを受け入れることの難しさや災害がもたらした心の傷の深さを感じました。

心を寄せる支援を学んで

臨床心理学科 2 年　沼澤 すみれ さん

私は、今回の災害ボランティアに参加し、改めて復興にはまだ時間がかかり、復旧支援の継続が必要だと強く感じました。ボランティア活動を通じて、支援がつながり合い、過去から現在、未来へとつながっていることを実感しました。また、被災地で心から寄り添うことの重要性も学び、『力仕事だけでなく、心配されていると感じることで不安が和らぐ』という言葉が心に残っています。一人の力は小さくても集まれば大きな力になることを実感し、そのことを今後の活動にも活かしていきたいと思います。

被災地の声を届ける

～次世代への架け橋として～

「あなたの想いが未来を創る。能登半島地震災害ボランティア報告会」の開催

10 月 31 日 (木)、災害ボランティア活動を振り返る報告会を開催しました。本報告会では、学生たちが活動を通じて感じたこと、学んだこと、そして未来への想いを、自身の言葉で語りました。

学生たちは、被災者支援が物資の提供だけにとどまらず、震災の記憶を風化させないことや、教訓を次世代に語り継いでいくことも重要な支援であると改めて感じたと述べました。また、地震災害に加え、9 月には豪雨による水害も発生しており、こうした災害への対応が求められる中、今回の報告会が被災地の声を聞き、社会に伝える「橋渡し」の役割を果たす場となることを目指して実施されました。参加者一同、これから私たちに何ができるのかを共に考え、支援の輪を広げていくための貴重な機会となりました。

「第 53 回全国社会福祉教育セミナー 2024 in 東京」でのポスター発表

11 月 16 日（土）・17 日（日）、東洋大学で開催された「第 53 回全国社会福祉教育セミナー 2024 in 東京」において、本学の学生が能登半島地震における災害ボランティア活動を中心としたポスター発表を行いました。

今回のポスター発表には、本学を含む全国 6 校（東洋大学、関西福祉大学、関西大学、明治学院大学、西九州大学、新潟青陵大学）の大学が参加し、各校が実施した学生主体の災害ボランティア活動について発表を行いました。　本学の学生は、他大学の災害ボランティアの取り組みを知るとともに、自分たちが現地に赴いて肌で感じた経験を多くの方と共有することができました。

「災害支援コーディネーター養成研修」の企画運営委員として出席

災害時に開設される災害ボランティアセンターの意義と役割を理解し、災害ボランティア活動を円滑に進めるため、社会福祉協議会、行政、NPO、JC など関係団体と連携・協働しながら被災者支援活動を実践できる人材を養成する「災害支援コーディネーター養成研修」が、毎年 12 月から 2 月にかけて開催されています。今年度は、本学ボランティアセンターの職員 1 名が企画運営委員として参加しました。

また、新潟県内で液状化被害が大きかった新潟市西区では、災害ボランティアセンターが設置され、本学ボランティアセンターの職員 2 名も支援活動を行いました。この活動がきっかけとなり、上記養成研修の企画運営委員のお声がけをいただき、平時から地域や関係機関とのつながりを築くことの重要性を改めて認識しました。それと同時に、被災者が求める支援をより深く理解する貴重な機会となりました。

ぼらフェス 2024

今年のテーマは「防災・減災」

10 月 26 日（土）・27 日（日）に開催された本学の学園祭「青空祭」において、ボランティアセンターは「防災・減災」をテーマに『ぼらフェス 2024』を出展しました。

今年は昨年より開催時間が延長されたことや、天候にも恵まれたこともあって、多くの方々にご来場いただきました。災害支援活動や防災意識の啓発、非常食の試食体験、骨髄バンクの普及活動などを通じて、幅広い年齢層の来場者と交流し、ボランティア活動の重要性や魅力を発信する場となりました。

Festival

骨髄バンク ブース

にいがた骨髄バンク応援団との共催で、骨髄バンクのしくみや骨髄移植の流れをポスターやぬいぐるみを使ってわかりやすく紹介しました。

また、災害時に患者さんが抱える困りごとについてもお伝えしました。

「ドナー登録ってちょっとハードルが高そう…」と思われがちですが、今回の学園祭をきっかけに少しでも多くの方に興味を持ってもらえたら嬉しいです。

▶ 骨髄バンクの説明員としても活躍中の学生による、「ドナー登録説明会」も実施！

ぼらくと ブース

本学ボランティアセンターや学生ボランティアコーディネーター『ぼらくと』の普段の活動に加えて、令和 6 年能登半島地震をはじめとする近年の本学ボランティアセンターの災害支援活動の様子を紹介しました。

また昨年に引き続き、野外力検定の体験ブースを設置しました。定規やタイマーを使わず、自分の感覚で長さや時間を測るゲームなどは子どもから大人まで大変好評で、多くの方に楽しんでいただきました。

赤十字 ブース

本学青年赤十字奉仕団としての活動をポスターで紹介したり、日本赤十字社新潟県支部からお借りした救援物資を展示したりしました。また、身近なものを使って簡単に作れるマスクやリュックの体験ブースや、フォトブース、非常食の試食コーナーも大好評でした！

さらに、令和 6 年奥能登豪雨の義援金も募り、多くの方にご協力いただきました。

▶ 非常食の試食では、発熱剤でアツアツに仕上がるものもあり、「こんなに種類があるんだ！」や「非常食って意外とおいしい！」と驚きの声をたくさん聞くことができました。いざという時に『備える』だけではなく、『実践できる』ことの大切さを改めて認識する機会になったと思います。

日本赤十字社のキャラクター『ハートラちゃん』も登場！

青年赤十字奉仕団

本学では 2014 年に青年赤十字奉仕団を再結成し、より積極的に防災や災害救護活動に取り組めるよう、日本赤十字社新潟県支部と連携し、団員の育成及び活動の活性化を図っています。

クリアできるかな？？

ミッション in ほんちょう

～学生たちがイベント内の企画・運営を担う！～

Mission in Honcho

6 月 30 日（日）に本町 6 番町商店街・人情横丁で開催された「ほんちょう日曜マルシェ」に、本学から 19 名（うち企画メンバー 7 名）が参画しました。

「ほんちょう日曜マルシェ」は毎月最終日曜日に開催されるイベントで、グルメやお買い物、ライブパフォーマンスなど、年齢を問わず楽しめる内容となっています。

今回は、株式会社ディモルギア様よりお声がけいただき、ほんちょう日曜マルシェ内で実施される『ミッション in ほんちょう』の企画に携わりました。具体的には、子どもたちが参加できるゲームやワークショップの企画からルール決め、道具の制作、当日の運営までを担当しました。

ミッション in ほんちょう とは？

ビンゴ形式でミッションをクリアしていき、ビンゴした数だけトランポリンやレルヒさんのふわふわなどがあるパラダイスパークで遊ぶことができるという企画です。

▼本町の楽しい雰囲気が伝わるように、ゲームで使う道具の見た目をポップにするなどの工夫をしました。

◀子どもたちが地域を身近に感じ、本町への来訪頻度を高めるきっかけになるように、短冊作りや七夕飾りのワークショップ、謎解きなどの回遊型・体験型ゲームを取り入れました。

実践を通じて企画の楽しさを実感

企業と連携する事業でのゼロからの企画・立案は初めての経験であり、2 か月という限られた準備期間の中で、形にしていくことは大変でした。しかし、授業の合間を縫って打ち合わせや制作などの準備を行い、当日は実際にブースを運営し、机上では得られない企画・運営の楽しさを実感しました。

今回のイベントをきっかけに本町を身近に感じてもらえたり、地域の魅力を再発見するお手伝いができたら嬉しいです。

また、主催者や商店街の方から「対応が良く、頼んでよかった」、「またお願いしたい」といったお褒めの言葉をいただき、地域との関係性が深まり、新たな絆が生まれたと実感しました。

和田 かな子さん
臨床心理学科 2 年

キャンパスを飛び出し、地域に根差す、私たちの一歩

若い力で盛り上げる
～ボランティアで地域貢献～

毎年春と秋に古町商店街で開催される「古町どんどん」には、今年も多くの学生がボランティアとして参加しました。美味しい食べ物の販売やフリーマーケットだけでなく、ライブや大道芸などの催しも行われ、商店街を盛り上げる恒例のイベントとなっています。

今年もお声がけいただき、私たちはピンクのビブスを着用して、会場設営やゴミ回収、縁日のお手伝いなど、さまざまな役割を担いました。ビブスを着ていることで、多くの方々に声をかけていただく機会があり、嬉しく思うと同時に責任も感じました。来場者や商店街の方々が、応援や励ましの温かい言葉をかけてくださったり、感謝の気持ちを伝えてくださったりする姿が印象的でした。

来年度は、本学園の高校生も巻き込んで活動ができたらと考えています。

スマートフォンでつながる、心もつながる
～多世代で学び合う LINE 講座～

12 月 21 日（土）、新潟市中央区社会福祉協議会主催の「シニア世代のための LINE 講座」に本学ボランティアセンターが協力し、学生がボランティアとしてシニア世代の方へマンツーマンで LINE の基本操作をサポートしました。

参加された皆さまの学ぶ意欲に刺激を受けるとともに、相手に伝える難しさを実感し、「伝える力」の重要性も学ぶ機会となりました。また、LINE 以外の操作に関する質問も多く、スマートフォンの利用に対する不安を抱える現状にも気づかされました。活動を通じて、世代を超えた交流の大切さを実感し、地域とのつながりをつくる貴重な機会となりました。

◀ 活動の様子や学生たちの頑張りを新潟市中央区ボランティア・市民活動センターだより『ボラまち 第 23 号』に取り上げていただきました。

学生が届ける特別なクリスマス
～みんなで楽しむ交流イベント～

12 月 8 日（日）、新潟市総合福祉会館で開催された「クリスマスリース作り＆交流会」に一般財団法人新潟市母子福祉連合会からの依頼を受け、共催という形で学生がイベント内の交流会を企画・運営しました。

今回のイベントはひとり親家庭の子どもを対象に行われました。学生たちは「ひとり親家庭の子どもたちに学校・家庭以外の居場所を作りたい」という趣旨のもと、異なる年齢の子どもたちが一緒に楽しめるようなレクリエーションを考えました。参加した子どもたちは、学生たちとともにゲームや活動を通して楽しいひとときを過ごし、自然と笑顔があふれる交流会となりました。

咲かせよう、優しさの花
～認知症になっても暮らしやすい地域へ～

今年度も NPO 法人みどりの森と連携し、「オレンジガーデニングプロジェクト」に参加しました。このプロジェクトは、認知症になっても暮らしやすい地域づくりを目指し、全国でオレンジ色の花を咲かせる取り組みで、活動を通じて認知症への理解促進につなげています。今年は、昨年育てた花の種をプランターに植えて育て、たくさんの花を咲かせることができました。さらに多くの人にこの活動を知ってもらい継続することで、認知症になっても安心して暮らせる地域づくりをしていきたいです。

オレンジ色は
認知症啓発のシンボルカラー

VOLUNTEER CENTER

ボランティアセンター

本学ボランティアセンターは、ボランティア活動に関心がある学生とボランティアを依頼したい団体等とを丁寧につなぎ、サポートしています。また、近年は、新潟青陵学園として大学、短大のみならず幼稚園、高校も交えた活動を展開しています。ボランティアセンターとして社会情勢の変化に柔軟に対応し、地域社会と関係性を築きながら社会に開かれた活動を目指します。

ボランティアセンターの活動内容

ボランティア情報の提供

ボランティア活動を希望する学生に対し、学内のポータルサイトや掲示板等でボランティア情報の提供を行っています。
また、本学園の幼稚園や高校とも連携した活動を行っています。

コーディネート

ボランティア活動に関心がある学生とボランティアを依頼したい団体とを丁寧につなぎ、サポートしています。また、学生のボランティア活動前の不安などの相談にも応じています。

ボランティア活動

災害時の支援活動、共同募金、福祉施設、病院、地域の中でボランティア活動を行っています。他にも、学習支援活動、青年赤十字奉仕団活動等があります。

調査･学術的研究

ボランティア活動における学生のニーズ調査等を行い、時代に合わせたサポートや情報提供を行っています。

イベントや研修会の企画運営

ボランティア活動を始めたい学生や、ボランティア活動に磨きをかけたい学生のために様々なイベントの企画・運営を行っています。

学生ボランティアコーディネーターの養成

学生と同じ視点でコーディネートができる学生スタッフを養成しています。
ボランティア活動の企画や日頃のコーディネートを行い、主体性・人間性の向上を目指します。

大学1年生と編入生の必修科目との連携

4 月 19 日 (金) に本学の大学 1 年生と編入生の必修科目である「地域連携とボランティア」と連携し、『Change & Challenge　ボランティアへの一歩を踏み出そう』と題して授業を担当しました。
さらに、フィールドワークとして 6 月 14 日 (金) には、『2024 SEIRYO CLEAN UP DAY』と題し、この授業と連携した活動も行いました。当日は授業の受講生だけでも 272 名もおり、関係者を合わせると約 300 名での活動となりました。
普段の授業とは異なったフィールドワークを通して、実際に活動を行うことでしか得られない学びがあったと思います。
これらの授業を通じて、ボランティアの魅力に気づいてもらうきっかけづくりや、新入生とボランティアをつなぎ、今後の大学生活への後押しができたのではないかと思います。

▶ 今回、新たな試みとして、学生からの質問にリアルタイムで回答できる『LiveQ』というツールを活用しました。ボランティアについてのイメージを回答してもらったり、Q&A コーナーを設けたりするなど、受講生と相互コミュニケーションを図り、多くの学生が楽しんで授業に参加できたのではないかと思います。

学園全体を巻き込み、松林整備を継続的に実施

今年度も NPO 法人ウッディ阿賀の会や新潟地区コミュニティ協議会のご協力のもと、本学園の幼稚園児と一緒に松苗の植樹や、高校生とともに松くい虫対策のための伐採木の粉砕作業など、学園全体を巻き込みながら海風や砂から住宅地を守るための活動に継続的に取り組んでいます。また、他団体の方と世代を超えて交流することで木々の生態などの環境に関する知識を得ることができ、毎回学ぶことが多くあります。私たちが学園周辺の環境を整備することで、地域への関心や愛着が芽生えるだけでなく、日々の安全で安心な暮らしが、多くの人々の支えによって成り立っていることに気づくきっかけにもなります。1回の環境美化活動だけでは、大きな変化が現れることはありませんが、活動の積み重ねを通じ、環境保全に貢献できればと思っています。

「大学ボランティアセンター職員セミナー2024」にて動画紹介

9 月 12 日 (木)、日本ボランティアコーディネーター協会が主催する「大学ボランティアセンター職員セミナー 2024」において、本学ボランティアセンター及び青山学院大学シビックエンゲージメントセンターが動画にて紹介を行いました。
同セミナーには、大学ボランティアセンターの支援に携わる職員やこれから立ち上げを行う関係者などが参加しており、動画での説明後には質疑応答も行われ、地域を越えた情報共有を行うことができました。

＼学生ボランティアコーディネーター／

VOLACT
ぼらくと

本学では、学生ボランティアコーディネーターという制度を設けており、“Volunteer（ボランティア）＋ Act（行動する）” 通称『ぼらくと』としてサークル活動ではなく、ボランティアセンター直属のスタッフとして活動しています。2013 年 4 月に発足し、2025 年で 12 年目に入ります。
『ぼらくと』は東日本大震災でボランティアバスを出した際に「私たちにできることは何だろう」、「一緒に活動する仲間をもっと増やしたい」という想いが生まれたことをきっかけに学生から学生にボランティアの魅力を伝えられる組織を作ろうと発足しました。学生と同じ視線に立ち、学生に向けたボランティア活動の充実やコーディネーターとしてのスキルアップ事業の開催、学生と外部をつなぐ役割を担っています。

VOLACT の使命

1. ボランティアの**魅力**に気づく学生を増やす
2. ぼらくと自身の**人間力**を磨く
3. 地域との**信頼関係**を大切にする

VOLACT の VISION

Speed・Passion・Challenge
～ぼらくとが変える未来～

Speed	Passion	Challenge
日々の変化する社会情勢を見逃さず、先を見て行動する	社会を良くしたいという熱意	一歩踏み出す

VOLACT の 日常活動のご紹介

ボランティア活動のサポート

学生に満足度の高いコーディネートができるようにボランティアや研修会、学外の活動へ積極的に参加し、スキルアップを図っています。
また、一緒にボランティア活動を行いながらサポートも行っています。

定例ミーティング

月に 2 回定例ミーティングを実施し、情報共有や活動報告、協議などを行い、一人ひとり意見を出し合う機会も大切にしています。
オンライン形式と対面形式を組み合わせて実施しています。

広報活動

主に『SEIRYO VOLUNTEER』というボランティアセンターの活動情報誌と Facebook、Instagram にて広報活動を行っています！
学生の生の声を新鮮なうちに届けることを大切にしています。ぜひチェックしてみてください。

ぼらくとについて楽しく学び、理解しよう

学生ボランティアコーディネーター養成研修

ボランティアセンターの役割や学生ボランティアコーディネーターとしての心得など基本的な知識・技術を学び理解をするとともに、メンバー同士の交流を深めることを目的に学生ボランティアコーディネーター養成研修（通称：ぼらくと研修）を年に 2 回行っています。

任命までの流れ

01 周知・活動紹介
ぼらくとのことを周知するために新入生の必修科目や新入生歓迎会にて募集を兼ねて活動紹介を行っています。

02 申し込み
募集要項を確認して加入の申し込みをします。

03 養成研修への参加
ボランティアセンターの役割、学生ボランティアコーディネーターを務める上での知識・技術などを学びます。

04 任命式
養成研修の参加を経て、最終的に意思確認を行い、正式に学生ボランティアコーディネーターとして任命され、センター長から任命書が授与されます。

共に活動する仲間と楽しいイベントも開催！

クリスマス会兼親睦会

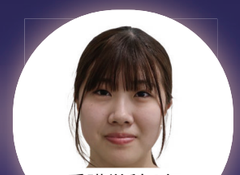
今年も学生企画のクリスマスイベントを開催しました。クリスマスケーキのデコレーションや、プレゼント交換などのレクリエーションを通じ、メンバー同士の交流を深め、来年度の活動への意欲を高める場となりました。

VOLACT

2024年度 学生ボランティアコーディネーター
『ぼらくと』メンバー紹介

人間総合学科 1年
鈴木 真央

看護学科 1年
佐藤 蒔子

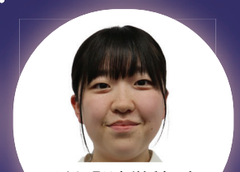

看護学科 1年
関 凜乃

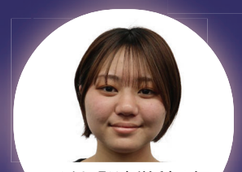
看護学科 1年
仁多見 陽菜

看護学科 1年
渡邊 菜々子

社会福祉学科 1年
長谷川 千稔

子ども発達学科 1年
小川 結


子ども発達学科 1年
唐沢 知歩


子ども発達学科 1年
岸本 心優

子ども発達学科 1年
山本 莉緒

子ども発達学科 1年
若山 文香

臨床心理学科 1年
古川 優

看護学科 2年
新井 陽奈

社会福祉学科 2年
北澤 花帆

社会福祉学科 2年
木村 里々香

社会福祉学科 2年
蔵田 美莉愛

社会福祉学科 2年
黒井 亜美

子ども発達学科 2年
関根 千優

臨床心理学科 2年
木村 実結

臨床心理学科 2年
佐藤 天音

臨床心理学科 2年
髙橋 ののか

社会福祉学科 3年
寺崎 雄晴

社会福祉学科 3年
佐藤 陽梨

社会福祉学科 3年
清水 映作

社会福祉学科 3年
鈴木 里佳

人間総合学科 1年
土田 萌夏

幼児教育学科 1年
須佐 采佳

幼児教育学科 1年
西岡 詩歩

看護学科 1年
近藤 杏莉

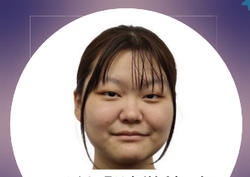
社会福祉学科 1年
宇野 捺未

社会福祉学科 1年
近藤 彩月

社会福祉学科 1年
坂口 冬音

社会福祉学科 1年
下田 朝己

子ども発達学科 1年
鈴木 苺


子ども発達学科 1年
髙橋 紗奈

子ども発達学科 1年
平松 穂花

子ども発達学科 1年
山賀 千夏

看護学科 2年
落合 美祐

看護学科 2年
塩入 七海

社会福祉学科 2年
五十嵐 ひな子

社会福祉学科 2年
猪股 千恵

社会福祉学科 2年
東海林 茜

社会福祉学科 2年
徳永 怜花

社会福祉学科 2年
長谷川 舞

子ども発達学科 2年
五十嵐 真衣

臨床心理学科 2年
沼澤 すみれ

臨床心理学科 2年
山口 真奈

臨床心理学科 2年
和田 かな子

看護学科 3年
石田 綾

社会福祉学科 3年
高根沢 杏海

社会福祉学科 3年
竹内 瞳

臨床心理学科 3年
大泉 凜

臨床心理学科 3年
松田 一花

場所 / アクセス

～編集後記～

いつも、本学ボランティアセンターの活動や取り組みにご理解とご協力をいただき、感謝申し上げます。

2024 年は、元日に能登半島地震が発生し、多くの方々が被災される厳しい年明けとなりました。8 月には石川県の奥能登地域を訪れて支援活動を行い、被災地での作業や被災者の方々との交流を通じて、直接的な支援だけでなく、寄り添う心の大切さを改めて実感しました。

これからも被災地の復興を支える活動を続けるとともに、地域や社会のさまざまな課題に取り組んでいきたいと考えています。

NIIGATA SEIRYO

学校法人　新潟青陵学園
新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部
ボランティアセンター

〒 951-8121
新潟市中央区水道町 1 丁目 5939 番地
TEL　：025-266-0189
FAX　：025-230-7751
MAIL ：vcenter@n-seiryo.ac.jp
WEB　：http://www.n-seiryo.ac.jp/

お越しの際は、
QR コードをご参照ください。
（Google MAPs が開きます。）

新潟青陵大学・
新潟青陵大学短期大学部
公式 HP

本学ボランティアセンター
公式 Facebook

本学ボランティアセンター
公式 Instagram

この活動情報誌は学生ボランティアコーディネーター『ぼらくと』が作成いたしました。